

受難節にあたって一鶏が二度泣く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろうー

学院長 嶋田 順好

人はだれでも、ありのままの自分を見られ、知られることを恐れます。とりわけ自分の破れ果てた恥ずかしい部分を他人にさらすことは耐えられないことです。しかし、またそのような状況に追い込まれつつも、その時にこそ、自らを受けとめ、赦し、愛してくださる存在に出会えたら、人は、新しい人間へと変えられることも確かなことではないでしょうか。

イエスが逮捕され、裁判にかけられる少し前、最後の晩餐を終えた直後、イエスは弟子たちに「あなたがたは皆、わたしにつまずく」と告げるのです。その時12弟子の筆頭格的存在のペトロは、口を極めて誓います。「たとえ、あなたと御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません」と。ですから、ペトロはイエスが逮捕された後も、決死の思いをもって最高法院の裁判を見守ろうと、裁判が行われる大祭司の館の中庭にただ独り身を潜めるのです。

ところが、ペトロがイエスと行動を共にしていたことを記憶していた女中に「あなたもあのナザレのイエスと一緒にいた」と見咎められてしまいます。その時、思わず知らずペトロの口をついて出た言葉が「あなたが何のことを言っているのか。わたしには分からないし、見当もつかない」という自分を守るための偽りの言葉でした。さらに女中や周囲の人から「この人は、あの人たちの仲間です」、「確かに、お前はあの連中の仲間だ。ガリラヤの者だから」と三度詰め寄せられ、ついには呪いの言葉さえ口にしながらか「あなたがたの言っているそんな人は知らない」と誓いはじめます。するとすぐ、鶏が鳴き、ペトロは「鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」とイエスが言われた言葉を思い出して、泣き出すのです。

ペトロはこの時、文字通り号泣したことでしょう。数時間前「たとえ、御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません」とイエスに誓った言葉を物の見事に破ったことを悔いて涙したに違いありません。しかし！それだけがこの時のペトロの涙した理由のすべてではありません。この時、ペトロがはっきりと思い起こしていたのは、まずもって自分のあの誓いの言葉ではなく、「鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」とのイエスが告げた言葉でした。つまりペトロは、イエスが既にあの時、この自分がイエスを否むことをご存じであった事実打たれたのです。

イエスは、あの時、なぜペトロにそのことを告げられたのでしょうか。言うまでもなくペトロが、自分の最も惨めな破れ果てた姿に直面させられた時、既にイエスご自身が、そのペトロの弱さを知り抜かれ、そのペトロのためにも十字架に赴かれる救い主であることを思い起こして欲しかったからに違いありません。

同じ悲しみを嘆く涙でも、自分をただただ打ち叩き、責め続けることにおいて流される涙と、イエスの言葉を思い起こして自分の弱さをイエスとの関わりにおいて涙するのでは決定的な違いが起こるのではないのでしょうか。そこでこそパウロの言うように、悲しみは「御心にかなった悲しみ」となり、「取り消されることのない救いに通じる悔い改めを生じさせ」（Ⅱコリント7章10節）ることになるからです。そして、本当に自分の弱さ、破れ、罪と戦うために立ち上がることができるようになるのです。ペトロの悲しみが、イエスの言葉を思い起こすことにおいて流された涙ということにおいて、すでに慰められた悲しみなのです。

バッハのマタイ受難曲は、この部分のペトロの思いを、心にしみいるバイオリンの伴奏にのせて、アルトのアリアとして次のように歌います。

憐れみたまえ、わが神よ／したたり落つるわが涙のゆえに／こを見たまえ、心も目も

汝の御前にいたく泣くなり。あわれみたまえ。あわれみたまえ！（杉山好訳）

驚くべき事にバッハは、このアリアの第1、第15、第23小節で讚美歌21 310番「血潮滴る主の御頭」としてよく知られるコラールの冒頭の旋律を通奏低音として用いました。泣き崩れるペトロの罪の身代わりとなって茨の冠をかぶせられ、頭から血潮を滴らせつつ十字架につけられるイエスがいてくださるのです。その方の愛に支えられて、このペトロの悔い改めが歌われるとき、その悲しみは既に慰められた悲しみとなり、そこにこそ罪人が新しい人に変えられる突破口が開かれることをバッハは誤解の余地なく明瞭に告げなかったのです。